片中の旅のためし

コンソーシアム準備会　高知・須崎

活動を持続可能なものにしていくため、ライフミュージアムネットワークではコンソーシアムの設立を模索しています。そのヒントをいただきに、ネットワークを組み継続的な文化活動を行っている高知・須崎を訪ねました。

いずれの館・施設にも共通していたのが「地域やそこに住む人といかに丁寧に関係を築いていけるか」。ヒアリングを通して、地域と館と行政をうまくつなぐコーディネーター的存在が、自立・継続の鍵であると痛感しました。

【その1】

日　　時　：2020年2月7日（金）　10：00～12：00
訪　問　先　：藁工ミュージアム
お話しをお聞きした人：松本志帆子氏（藁工ミュージアム学芸スタッフ）

【その2】

日　　時　：2020年2月7日（木）　13：00～14：30
訪　問　先　：アーツカウンシル高知
お話しをお聞きした人：齋藤努氏（公益財団法人高知県文化財団主査（アーツカウンシル））

【その3】

日　　時　：020年2月7日（木）　15：00～16：00
訪　問　先　：高知県立高知城歴史博物館
お話しをお聞きした人：渡部淳氏（高知県立高知城歴史博物館長）

【その4】

日　　時　：2020年2月8日（金）　10：00～16：00
訪　問　先　：すさきまちかどギャラリー
お話しをお聞きした人：川鍋達氏（すさきまちかどギャラリー館長）

参　加　者　：初澤敏生（福島大学教授／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）
高田彩（ビルド・フルーガス代表／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）
江川トヨ子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）
塚本麻衣子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

高知市内の文化施設における横断的な連携（ミュージアムネットワーク）と須崎市内におけるアートスペースを中核とした地域との連携について

ビルド・フルーガス代表　髙田彩

2月7、8日の2日間にかけて、高知県高知市及び須崎市を訪問し、それぞれの地域で展開されている地域連携について現地関係者のお話を伺いました。

1．「こうちミュージアムネットワーク」について

高知県の文化施設で構成される組織「こうちミュージアムネットワーク」は、平成13年度に11館が連携した「山内一豊入国400年共同企画」の実績をきっかけに、平成14年度に予算措置がなされた後、平成15年3月に設立。現在70件の施設が参加し、参加館は博物館や美術館のみならず、資料の研究・保存・展示を行っている文化施設、文化行政機関、教育機関、寺院や民間の文化施設なども含まれ文化施設連携の枠を広げて構成されています。「高知県の博物館関係者の知識や技術の向上と、情報の共有により効率化をはかり、県民によりよいサービスを提供する」ことを目的に、実働隊である学芸員や施設職員らの人材育成と環境整備に取り組んでいます。事務局を館内に設置している高知城歴史博物館館長渡部淳氏は、文化施設の活動主体となる学芸員らの実質的な業務に必要なことを幹事会で決議することで職員同士の実用的な連携を生みだすことができていること、そして自治体職員や施設職員の名簿を作成し毎年更新することで参加館における職員の専門性を常に把握し、互いに協力体制を築くことができると話していました。平成30年に愛媛県で起こった豪雨災害では、県域を越えて文化財レスキューを行うなど、ネットワーク機関だから実現できた取り組みもあります。また、各施設の予算規模に関わらず継続的なネットワーク構築を目的に会費無料とするなど、機能的な仕組みづくりの重要性についてもお話くださいました。このような機能的かつ実用的なネットワークを継続的に運営していくためには地域から必要とされる機関として地域連携を強化していく必要がありますが、高知城歴史博物館では、地域支援員という専門スタッフを新たに配置することで、地域資料の保存や調査、歴史文化活動への協力、地域の歴史文化の紹介などを地域の人々と共に取り組み、地域と施設との接続を強化しています。各施設における地域連携事業が活発化することで、同ネットワーク機能がさらに効果を発揮し、ネットワーク機関が県内における文化の窓口としても機能するだろうと思います。

2．「アーツカウンシル高知」について

高知県は、平成29年3月に新たに「高知県文化芸術振興ビジョン」を策定。同年5月に公益財団法人高知県文化財団総務部企画課に専門員齋藤努氏を配置し、文化芸術団体などへの効果的な支援や、文化芸術に関わる人材の育成、魅力のある文化プログラムの創造を推進するために、文化施策に関する高い専門性を有した文化芸術振興組織「アーツカウンシル高知」を設置しています。齋藤氏は、県内の文化芸術団体等への助言とともに、調査研究、情報発信等を行いながら、県内の文化芸術を推進するための実態や課題を把握し、県への報告提案を行っています。

「こうちミュージアムネットワーク」の参加館である「藁工ミュージアム」は、藁を保管していた藁工倉庫を改修し、アール・ブリュットの美術館として平成23年12月に開館。NPO法人ワークスみらい高知による運営で、作品展示に加え、同館は就労継続支援事業所として利用者の働く場として展開しています。同館学芸員松本志帆子氏は、アーツカウンシル高知が高知県内で文化芸術活動を行っている団体や個人をデータベース化した「芸事図鑑」を活用し、県内アーティストと共に出前講座の実施や地域に開かれた場づくりに取り組んでいます。また、松本氏は、地域文化としての藁を資源に、作品制作や藁文化の掘り起こしにも取り組んでいきたいと今後の展望を思い描いています。芸術のみならず生活文化の要素を活動に加えることで、利用者の活躍の場を「文化の担い手」としても広げていくことは非常に意味深いことだと感じました。

一方で、地域連携のための予算確保の難しさや福祉系施設間のネットワークの弱さなど、ソーシャルインクルージョンにおける横断的な連携への切実な課題がありました。このような現状をふまえ、中間支援組織としてアーツカウンシル高知がどのように地域課題に向き合い、文化芸術にとどまらず、県内のネットワークを育んでいくのか今後の展開に期待したいと思います。

3．「すさきまちかどギャラリー／旧三浦邸」について

須崎市が取り組むすさき・サービスエリア・タウン（SAT）構想は、「高速道路の県西部への延伸整備に伴い、須崎のまちが素通りのまちとならないよう、「須崎市まち全域がサービスエリア」として機能し、交流人口を増やし、まちに賑わいをもたらす」ことを目的とし、その取り組みの一つとして、平成22年2月に地域のシンボル的建造物を活用し、文化交流施設として「すさきまちかどギャラリー」は開館しています。須崎の中心部に位置し、須崎の町の発展に大きく寄与した三浦家の元邸宅の土地を須崎市が購入。平成26年には、大規模改修を行い、設備などの補修を行っています。地域おこし協力隊として千葉から移住したアーティスト川鍋達氏がコーディネーターとして配置され、地域活性化事業や補助金を活用しながら、ギャラリーを拠点に新たな交流を生み出しています。現在は「NPO法人暮らすさき」が市から施設の運営管理と地域活性化事業を請け負い、文化交流拠点として地域の人との対話をうみだす企画を実施。特に、滞在制作と交流を通じて新たな視点から須崎の魅力を探るためのプロジェクト「現代地方譚」は県内外から注目され、交流人口の拡大に貢献しています。定住促進には至らぬものの地域の人が自発的にイベント時にあわせて空き店舗をイベント会場にするなど、地域の人が主体となり積極的に地域の活力を生み出しているのが印象的でした。一方で、この地域が抱える問題としては、高齢化が進む中、高台移転などにより人口流失が追い打ちをかけ過疎化が加速していることが挙げられます。このような状況を食い止めることは困難ですが、すさきまちかどギャラリーは文化拠点の取り組みとして、早急に地域資料の保存や調査、歴史文化活動への協力、地域の歴史文化の紹介などを地域の人々と共に取り組む必要があると感じました。予想される災害に備え地域の防災力を高めると同時に、この地域に根づく文化を様々な形で引き継げるよう同ギャラリーが中心となり専門家と共に取り組んでいくことを期待しています。

参考文献：
高知県文化芸術振興ビジョン概要版（平成29年3月）
アーツカウンシル高知 http://artscouncil-kochi.jp/
藁工ミュージアム　http://warakoh-museum.com/
まちかどギャラリー/旧三浦邸　http://machikado-gallery.com/

地域の中で活動する博物館に

福島大学教授　初澤敏生

今回の調査で痛感したのは、地域との連携の重要性でした。それを最も強く感じたのは高知県立高知城博物館（以下、「城博」と略す）でのヒヤリングでした。城博では独自の事業として「集落」の歴史を記録しています。これは各集落の歴史を掘り起こして冊子にまとめていくというもので、1集落あたりほぼ1年の時間をかけて調査しています。集落を単位としたのは、それが人々の生活の基礎単位であるからです。グローバル化が進む時代とは言え、1人の人間が生活する範囲はそれほど広くありません。その地域の歴史はそこで暮らす人々の生の記録と重なります。ある集落でこの事業が終了したとき、協力してくださっていた地域の方が「これで安心して死ねる」と言われたというエピソードはこれを象徴するものであると思います。研究者による研究は地域から資料を「収奪」するだけで、地域の役に立たないという批判を受けることが多くあります。しかし、この事業は「地域のための研究」で、研究を進めるほど、地域の人々に喜ばれています。高知県には1、020の集落があるとのことで、「1000年計画」で進めるとのことでした。

これを進めるにあたり、城博では「企画課」を設置して「企画員」を置いています。企画員は地域の中で活動し、その要望等に対応していくのが目的の部署です。そして、様々な地域の中で活動する「企画員」を「学芸課」の「学芸員」がサポートするという形をとります。「企画員」が地域で活動し、「学芸員」がそれを支援するというシステムが成立していることがこの活動の核であると思います。

しかし、どの組織でも多忙化が進んでいる今日、「そんなことをやっている暇はない」という声が聞こえてきそうです。しかし、城博ではそのような声は上がりません。その背景として、城博設置時に「なぜ、今、このような箱モノが必要なのか」という、かなり強い反対運動があったことがありそうです。ヒヤリング時にも館長から「博物館などは必要ない、という声が上がった時に、多くの県民から『城博は必要だ』という声が上がらなければ、守ることはできない」との指摘がありました。地域と密接に結びつくことが博物館の存立基盤となっているのです。

同様のお話を「すさきまちかどギャラリー」でも伺いました。ここでは「現代地方譚」というアートイベントを毎年開催しています。今回の視察時には7回目の会が行われていました。これは当初は観光庁の社会実験で行われたアートイベント（アーティスト・イン・レジデンス）だったのですが、好評で、その後も継続して行われているものです。当初は「アーティストのためのイベント」という色彩が強かったようです。と言いますのも、当時、様々なアートイベントが行われていたものの、それに参加するアーティストには十分な報酬が支払われていないような状況でした。「現代地方譚」はそのようなことのないイベントとして開催されたということでした。しかし、5回目ぐらいから性格が変化してきました。アーティストを中心としたイベントから地域住民を中心としたイベントへと転換したのです。（お話を伺った方はこれを「最初手伝ってくれたアートをつくれなかった人が、その後時がたち、自分たちで企画する側になった。」と表現されました。）これにともない、イベントテーマも変化してきました。5回目から美術に加えて演劇や音楽なども取り入れられるようになり、第6回はメインテーマも「防災」と設定されました。「アーティストによるアーティストのためのイベント」が、「地域住民とアーティストによる地域住民とアーティストのためのイベント」へと変化したと言えます。地域の中で行うアートイベントだからこそ、地域との結びつきが重視されていると言えます。

この二つの事例は、博物館などと地域との結びつきが不可欠なものとなっていることを示すものであると言えましょう。これまで、博物館などはいかにして見学者に来て頂くかを重視していたのではないでしょうか。数値目標として入場者数を設定している館も少なくないでしょう。しかし、博物館の側が地域に出て行けば、その活動の幅は大きく広がります。ただし、その際に行う活動は、市民と密接な関係を持つことが求められます。今、博物館に求められているのはそのような在り方ではないでしょうか。学芸員やアーティストが自分の考えだけで展示やイベントを行うのではなく、地域の中で、地域住民の声を幅広く聞きながらそれに応える形で事業を進めていく、そしてそれを通して地域の人々が喜びを感じられるようにすることが必要になると考えます。

花王
三共
武田
山之内
住金
神戸鋼
中山鋼
高圧瓦
三菱電
電精器
キャノン
第8回平例祭
キャンドルナイト
2020.2.29

コンソーシアム準備会　松山

２０１４年から続く道後オンセナート・道後アートの実行委員会事務局を務める鎌田さんにお話を伺いました。２０１８年よりアーティストの日比野克彦さんをプロデューサーに迎えたことで、観光客誘致を目的とした作品鑑賞型のイベントから、地域住民の参加によるプロジェクト型に舵を切ったといいます。地域住民が自ら考え実行し、１００年先にこうありたい道後をつくっていく、その共有と仕組みづくりがこれからの課題とのことでした。

午後は松山市の文化事業を担う松山ブンカ・ラボの戸舘さんにお会いしました。公・民・学の協働による松山市文化創造支援協議会（愛媛大学、ＮＰＯ法人シアターネットワークえひめ、ＮＰＯ法人クオリティアンドコミュニケーションオブアーツ、松山市文化協会、松山市）が愛媛大学社会共創学部に資金を寄附することによって設置された寄付講座（大学や研究機関の研究・教育活動の一環として民間企業などからの寄付金を財源に開設される講座）が母体となる、全国でも珍しい運営体制をとっています。

文化やくらしを大切にするまちづくり。そのために各地で様々な取り組みがなされています。多くを学ぶ会となりました。

【その1】

日　　時　：2020年2月9日（日）　10：00～12：30
訪　問　先　：道後アート実行委員会事務局
お話しをお聞きした人：鎌田めぐみ氏（松山市産業経済部道後温泉事務所 道後温泉活性化担当）

【その2】

日　　時　：2020年2月9日（日）　14：30～16：30
訪　問　先　：松山ブンカ・ラボ
お話しをお聞きした人：戸舘正史氏（愛媛大学社会共創学部寄付講座助教／松山ブンカ・ラボディレクター）

参　加　者　：江川トヨ子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）
塚本麻衣子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

G-1
ひみつジャナイギャラリー
「ストックギャラリー」
Stock Gallery
ひみつジャナイギャラリーに応募した、松山市在住の障がいのある方、又は、市内の福祉施設や支援学校などに入所及び通所、通学している方など約30組の作品を、山澤商店のお酒や飲み物をストックされている倉庫をお借りして展示しています。展示しているアーティストが持つ力をストックし、広く社会に知ってもらい、多様な価値観に触れることで、道後の街が新たな彩りをまといます。
"天住41"
と18-64

ncfranc

本事業の実施にあたって多くの方のご協力を賜りました。
本事業の趣旨に賛同してくださったみなさま、
応援してくださったみなさま、
共に福島から「いのち」と「くらし」を学び、考え、
言葉を交わしてくださったみなさまに
心より御礼申し上げます。

文化庁令和元年度地域と共働した博物館創造活動支援事業
ライフミュージアムネットワーク2019

ライフミュージアムネットワーク2019活動記録集

編　　集　　川延安直、小林めぐみ、江川トヨ子、筑波匡介、塚本麻衣子（実行委員会事務局）

デザイン　　藤城光

画像提供　　オープンディスカッション 災害とミュージアム
齋藤里香、柳谷理紗、佐藤克美、瀬戸真之、山崎麻里子、佐藤翔輔

スタディツアー　小さな博物館がつなぐ大きな奥会津
伊藤たまき

オープンディスカッション 私たちが大切にしたいこと
板橋淳也、榎本千賀子、金山町教育委員会、にいがた地域映像アーカイブ・データベース

県外事例調査　八戸
大澤苑美、高森大輔

フォーラム 活かす生きるミュージアム
大澤苑美、西澤真樹子、寺沢秀文、佐々木雅幸

撮　　影　　村越としや：オープンディスカッション・スタディツアー 動物と震災
オープンディスカッション・スタディツアー 大熊町のDNA
布田直志　：オープンディスカッション 災害とミュージアム
那知上智　：オープンディスカッション・スタディツアー 浪江・二本松交流のこれまで・これから
（いなわしろ写真館）　フォーラム 活かす・生きるミュージアム
フォーラム いのちとくらしとミュージアム 記憶と人間の方舟として
岩波友紀　：スタディツアー　小さな博物館がつなぐ大きな奥会津
川延安直、小林めぐみ、江川トヨ子、筑波匡介、塚本麻衣子

印　　刷　　北斗印刷株式会社
発　　行　　ライフミュージアムネットワーク実行委員会
〒965-0807　福島県会津若松市城東町1-25（福島県立博物館内）